

優秀賞

努力を称える言葉の力

岩出第二中学校 2年 上野 響也

人はいつも応援する時、「頑張れ」と声をかける。それは、本当にその人に頑張ってもらいたいから、一生懸命応援する意味を込めて出る言葉なのだろう。しかし、頑張っている人が「頑張れ」と声をかけられると、少し辛い思いにならないのかと思う時もある。もちろん、「頑張れ」と声をかけてもらえるのはとてもうれしいことだと思う。でも、頑張っているのに「頑張れ」と声をかけられたら、これ以上どう頑張ればいいのか分からないと思う時もあるのだ。

ぼくは、小学校の6年間ずっとサッカーをしていた。サッカーチームに入って暑い夏も寒い冬も外で練習や試合をしていた。夏は暑さで倒れそうになるほどだったが、それでも太陽の下で練習していたのを今でも覚えている。冬は寒さを紛らわすために、走って体を温めていた。ぼくは、ほとんど休むことなく練習や試合に参加して自分でもとても頑張っていたと思う。でも、コーチにはどんな時でも、「頑張れ」と声をかけられていた。どんなに頑張っても「頑張れ」と声をかけられると、ぼくは他にこれ以上どう頑張ればいいのかと思うことがあった。「頑張れ」という応援の言葉は、ぼくは「頑張ろう」というやる気を少し失くしてしまう時もあるのだと思った。でも、そういう時、ぼくは父に救われたと思う。父はよくサッカーの送迎をしてくれていた。たくさんの練習や試合に付き添ってくれ終わった後必ず「お疲れさま。よく頑張ったね」と言ってくれたのだ。その時、「頑張れ」と言われて固くなっていたぼくの心がフッとゆるんで楽になったのだ。その「頑張ったね」という言葉は、ぼくの頑張りを認めてくれるかけがえのない言葉になったのだと思う。だから、ぼくの心を軽くすることができたのだろう。ぼくは、頑張りを認めてもらえたうれしさと、少しの照れくささで上手く父に返事をするのができなかった。それでも、父はサッカーの終わった後には、ぼくに「頑張ったね」というぼくの頑張りを認めてくれる言葉をいつもかけてくれたのだ。その言葉があったか

ら、小学校の6年間はサッカーを続けることができたのだ。父が認めてくれたうれしきは、ぼくのサッカーを続ける大きな力となっていたのだ。サッカーは小学校の卒業と同時に辞めてしまったが、中学校ではバドミントン部に所属している。試合の遠征には父がよく送迎してくれている。スポーツの種目は変わってしまっても、父はいつでも「頑張ったね」という言葉をかけてくれるのだ。その言葉のおかげで塾と両立しながらバドミントンを続けることができていた。ぼくは、「頑張れ」には応援する気持ちがあり、「頑張ったね」には応援と頑張りを認める気持ちがあるように思う。だから、父はいつでもぼくの頑張りを認めてくれるのだと、父の言葉から感じるができるのだ。

人は自分の頑張りを認めてもらえると、さらに「頑張ろう」という力を持つことができるのかもしれない。「頑張れ」と「頑張ったね」の言葉の違いは少しだが、人の頑張りを認める言葉になるという大きな違いを持っているのだと思う。頑張りは人それぞれ人の数だけあり、頑張りの量は他の人が図れるものではないのだ。どんな事でも「頑張ったね」と認めてくれることが、大きな自信となり次の可能性へとつながるのである。「頑張れ」という応援と一緒に、「頑張ったね」と頑張りを認める言葉をかけることができれば、その人の気持ちを一步前へ進める後押しができるかもしれない。自分の「頑張ったね」という言葉が、人の心を動かす「原動力」になればうれしく思う。